



第 81 号 (年 4 回発行) 編集発行 弘 学 院 大 学 前 報 委 員 会 弘 広 報 刷 所 印 刷 所 (有)小野印刷所

2020(令和2)年度 九月期学位記授与式挙行



2020(令和2)年度九月期の学位記授与式が去る九月三十日(水)午後三時三十分より本学礼拝堂において挙行されました。今年度は、文学部英語・英米文学科二名、日本語・日本文学科三名の計五名が卒業いたしました。

弘学時報81号が皆さまの手に届く頃には冬の気配を感じるようになってきているかも知れません。眞宗教主の聖書朗読、祈禱の後、吉岡利忠学長より卒業証書が授与されました。その後吉岡学長より卒業生にお祝いとお励ましの言葉が述べられました。

青森県は三方を海に囲まれ、森や林、山々、平野、果樹園から海のさち、山のさち、畑のさち、川のさちなどの多くの恵みを受けており、このような恵まれた環境で暮らせる私たちは幸せだと思えます。もちろん四季折々の新鮮な食べ物も楽しめますが、特に秋の季節、食欲がそそるのは一体どうしてなのでしょう。この食欲、食に詳しい人たちが食通の人たちに限ったことでもなく私たちが感ずる

食欲という感覚を科学的に考えてみても面白く面白い記事載せてみます。科学的な分析をしてみようと食欲が出なくなってしまうかも知れませんが、まあかも知れませんが、ヒトはさまざまな環境の中で生きています。しかもどのよう環境にも影響されずからだの環境には常に一定の状態になるような機構が働いており、その調節は神経系の役割だったりホルモン系の働きだったりします。恒常性維持とも言い、体温維持もその一つです。秋になると気温が下がり湿度もさがり、これらはヒトを取り巻く環境の季節的変化です。寒くなると、恒温動物である私たちのからだは体温の恒常性を維持するために代謝をあげなければなりません。代謝とは生きるためにエネルギーを作り出すことであり、さまざまな代謝がありますが、寒くなると基礎代謝が関係してきます。特に冬に備えて基礎代謝

量を増やせばなりません。なにかしら冬眠動物のようですが、ヒトにもその遺伝子が残っているのでしょう。基礎代謝量をあげるには食事から栄養素を捕らなければなりません。食物中の3大栄養素である糖質、タンパク質、脂質はすべて消化・吸収されてエネルギーとなります。秋こそ、食欲の秋、ということになります。秋には、美味しい食べ物が出回るのでそれを後押しすることは自然の成り行きです。

さて、夏は朝早くから夜遅くまで明るいですが、秋は陽が短くなってきます。日照時間が短くなるのである種のホルモン(セロトニン)の分泌が少なくなってきました。セロトニンは脳から分泌される神経伝達物質ですが、そのホルモンは糖質や蛋白質を摂取することによって増え、最後に栗ご飯という順番で如何でしょうか。ゆっくりと時間をかけて頂き五感を感じながら楽しむことはメタボ対策にもなるはず。それにスポーツの秋、運動を加えなければなりません。このような知恵や知識を備えた美食家は病気にもなりにくいようです。一石二鳥、一石三鳥にもなりそうです。

食欲の秋

学長 吉岡 利忠

中長期目標実施計画の 確立・実践に向けて

学校法人弘前学院 理事長・学院長 阿保 邦弘



十四「教育改革の本丸」 『グランドデザイン答申Ⅱ』

警戒はしていたのだが、弘前内でクラスターが発生した。他県での感染をひと事のように思っていた矢先に、大挙して襲い掛かってきた。

国や自治体のトップには即時の決断を迫り、人類が築き上げてきた医療体制も簡単に破壊する勢いを持つ、なかなか厄介なウイルスである。

ところで、前号では「グランドデザイン答申」に対して、私学関係者を中心に批判的な意見が多かったと述べて終わった。

2018.6.28前後から課題を指摘し始めた。中間まとめの前日には「答申には高等教育の新たな姿が提

示されていない、内閣府やその諮問機関の方針の引き写しである、従来路線の延長でしかない、予算措置がなされていない(朝日新聞「2040年の大学変わる姿」2018.6.27日付)という記事が出た。

大学関係者では、答申直前にもかかわらず法政大学総長から「大学の類型化、特に私大の画一化」の観点で、強い疑問が投げかけられた。(日本経済新聞 2018.10.15日付)

教育芸術新聞「アルカディアの風」(本学が加盟している日本私立大学協会発行)は、中教審への諮問(文部大臣諮問 2017.

3.6)当初から批判を展開した。集中審議に入る直前には「建学の精神をよりどころとし、多様な価値追求をモットーとする私立大学に、官製の機能別分化を求めることは画一化を招来する懸念がある」と危惧を述べた。

従来、私立大学は時代の細やかなニーズを捉えた役割や、社会が求める機能は果たしてきたものの、議論そのものへの牽制球を投じたのである。

中教審中間まとめ発表の時点では、4つの論点を示して問題点を述べている。 1つめは「今後の我が国の高等教育の全体像をいかに描く

か」ということについてである。国立・公立・私立という大学の設置形態論や、学校教育法規定の設置者負担主義の原則も含めて、抜本的な検討が必要ではないかというのである。

2つめは、「国公私立大学の役割の明確化」についてである。社会のニーズに定評してきた機動的な私立大学は、多様な価値追求・人材養成に定評があり、それを今後とも伸ばしていくべきではないかという点である。

3つめは、「高等教育への国の財政支出の抜本的拡充方策」と、教育費負担の在り方(問題)についてである。

公費支援格差の是正策を学費無償化の議論も含めて検討し、公正・公平な高等教育政策として示すべきだと述べている。

4つめは、「地方に立地する中小規模私立大学を、今後の時間軸において支援する方策として、補助金配分基準の検討を行う」ことについての批判である。

特に、定員充足率を補助金配分基準とすることは大問題であり、地域で重要な役割を担う中小規模私立大学の社会貢献に水を差すだけではなく、国が進める地方創生政策とは全く矛盾している、真つ向からは正すべき課題を提示した。(つづく)

2020年度 一年生の特待生授与者

二〇二〇(令和二)年度の弘前学院大学特待生(二年生)に、十月三十日(金)十二時より賞状の授与が行われた。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部 一年 福士さくら

◆社会福祉学部 一年 井澤くる未

◆看護学部 一年 井上 明



研究紹介 48

引きこもりの回復過程に合わせたアプローチ方法の必要性について

社会福祉学部 社会福祉学科 講師 駒ヶ嶺 裕子



私は、引きこもる本人と家族の回復過程における効果的な方法について福祉的な視点から研究しています。引きこもりとは、「仕事や学校などに行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6か月以上続けて自宅に引きこもっている状態をいう」と定義されています。近年、内閣府が発表した全国の引きこもり者数は、年齢別に40歳から64歳が61・3万人、15歳から39歳が54・1万人の約115万人と推計されました。この結果から若者の問題としてとらえられてきた引きこもりは、さまざまな出来事を経て中高年までを対象となり、いっそう注目されることとなり

ました。しかし引きこもりに対する支援については、今日まで統一した対応策らしきものがなかったため、福祉的就労支援、心理的支援、医療的支援などが先行した結果、本人と家族の支援が複雑化してしまつたと考えられます。この引きこもりが長期化したことで親の年齢が70代、80代と高齢化の傾向が見られており、80代の親が50代の子どもの日常生活の面倒をみる『8050(はちまるごーまる)問題』が社会的に取り上げられるようになりました。このように引きこもりが長期化する要因としては、解決策が見いだされなかったことも含めて、わが国の家族形態の特徴が考えられます。第一は、親との同居に対する抵抗感が低いという点です。第二に、たとえ失敗しても家族という居場所があるという点です。しかし、その家族も引き

「看護師に向いている? 向いていない?」

談話室

看護学部 看護学科 助手 岩淵 美沙



最近実習指導を担当した学生から、「私、看護師に向いていない気がします、これからちゃんと看護師になれるか不安です。」と相談を受けました。実習を通して患者さんとのコミュニケーションや日常生活の援助を行なつて

いく中で、戸惑いや不安を感じる学生は多いように思います。「まだそんなふうには考えられないよ。」と、とっさに返答しましたが、思えば私も14年間看護師として働く中で、何度も自分が看護師に向いていないのでは?と悩んだことがあります。ミスをして先輩看護師に怒られた時、患者さんとのコミュニケーションがうまく取れなかった時、患者さんの死に直面し大きなショックを受け

ヒロガク教養講話

弘前市長による特別講話

令和2年7月30日(木)、ヒロガク教養講話の特別講話が行われました。ヒロガク教養講話は新入生を対象として、学習意欲の向上や社会の一員として活動できる人材の育成を目的とした初年次教育科目の一つで、主に青森県でご活躍されている方々から貴

重なお話を聞くことができる科目です。今年度の特別講話は弘前市長である櫻田宏氏が「みんなで創り みんなでつなぐ あずま

しいりんご色のまち」というタイトルで、市長の(1)自己紹介、(2)幼少期から弘前市職員になるまで、(3)市職員時代の想い、(4)弘前のまちづくり、(5)これからの弘前、(6)弘前の将来を担うみなさんへという6つの事柄についてお話しくださいました。ここではその概要についてご報告いたします。



市長は幼少期から高校時代まで引つ込み思案で人と話すことが苦手であったが、大学生になると積極的に行動できるようになったとのことであった。その変化のきっかけは、大学入学時に先輩から飲み

会の調整役に指名されたこと、および飲食店での接客や工場の社長からの学びであったそうである。次に市職員時代の想いについて、エレクトロカルファンタジー、ひろさき創生塾、やわラボを挙げ、お話しなされた。弘前市役所に就職した後、平成3年の台風19号、いわゆるりんご台風により、りんごが落下するなどの壊滅的な被害がおこった。これにより町や子どもたちが元気を失い、落ち込んでしまったわけであるが、なんと元気が付きたいと考えて、エレクトロカルファンタジーを始めたということであった。当初は

市からの予算はなかった。しかし、多くの賛同者に支えられて、経費はすべて募金で集め、作業もボランティアで行い開催することができた。当初は1回限りでもと考えていたが、町を元気にしたいという想いが大きくなりとなり、現在は弘前市の公共事業となつた。気がつけば21年間続いており、町に新たな魅力がうまれた。ひろさき創生塾は、地域が活性化するために、市民自らが考え、行動に移すことが必要と考えて、住みよい地域づくりのための、創造性に恵まれた行動力のある人材を育成するために実施された事業である。また、やわラボは月2回程度、18時から20時に弘前大学コラボ大1階で、学生や地域の社会人などがゆるく集まり、自由に意見交換する場である。やわラボにおいて自由な意見交換から想定を超えた発想が生まれた。また実際に取り組まれたこととして、新たなインターンシップの実証研究や市民参加型まちづくり1%システム支援事業への参加などが紹介された。

弘前のまちづくりについては、弘前市の現状と課題や今後の人口構造の変化をもとに、また市民との対話により市民の想いが込められた弘前市総合計画を作成し、快適で安全な市民生活の実現とひとづくり(1)市民の「らし」を支える、(2)市民の「いのち」を大切に、(3)次の時代を託す「ひと」を育てる、(4)緊要の課題への着実な対応(1)地域コミュニティの維持・活性化、(2)2025年の人口構造の変化に向けた早期からの対策、(3)次の時代を託す「ひと」について説明があった。具体的には、市民自ら実践するまちづくり活動の経費を支援する公募型の補助金制度(個人市民税の1%相当

第7回保健科学研究会の開催

学長 吉岡 利忠



第7回保健科学研究会が2020年(令和2年)9月12日(土)午後1時から本学一号館4階で開催されました。大会長は学長という立場でしたが、本研究会の事務局の上三聖治教授の至れり尽くせりの配慮により滞りなく進められました。殊にコロナ禍にあつては感染防止のための対応では参加者全員が安心して研究会への発表、討論などを行うことができました。開催数日前までは30度を超す猛暑でしたが、幸いのこと開催日はなんと10度以上も低くなり来場者には素晴らしい環境の下で研究会に参加できました。



本研究会は青森県内の高等教育機関(弘前大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、弘前学院大学)で組織された保健医療福祉の関係者が日々額を財源とする。である市民参加型まちづくり1%システム支援事業、市民・事業者・行政が連携するごみの減量、人口減少社会における地域の維持・活性化のため弘前市と周辺7市町村の地域間連携、地域の生活を支える弘前鉄道の活性化支援、市の基幹産業であるにもかわらず後継者不足である農業の新たな担い手を育成する農業里親研修などが紹介された。

今回の弘前市長の特別講話を聞いて、学生らは大学を卒業した後、社会で必要とされる能力について知ることができたのではないだろうか。各々の学生が今回の講話を聞いて感じたことや考えたことを大切にするとともに、社会で必要となる能力を身につけるために自ら行動をおこすことを期待する。また、私たち教員が新たなことに挑戦する姿を学生に示すことも、創造性と行動力を兼ね備えた人材の育成につながるのではないだろうか。学生のみなならず教員にとっても有意義な特別講話であった。

(文責 看護学部 准教授 広報委員 宇田宗弘)

教育実習を終えて

文学部 英語・英米文学科4年 山口 尚人



私は、9月7日から10月2日までの4週間、平川市立平賀西中学校で教育実習をさせていた

だきました。主に2年生の英語の授業を担当しました。

実習初日から2日目までは学校教育に関する講義や英語の授業の参観をし、実習3日目から

実際に授業をしました。担当の先生の授業を参観し、別の学級

でその授業を模倣するというもので、簡単そうに思っても実際に

授業をしてみると思うようにいかず、自分の実力不足を痛感

したことを覚えています。授業

また、部活動では、バスケットボール部の練習に混ざったり指導したりしました。実習中に

中体連新人戦地区大会がありました。平賀西中学校は見事優勝

し、とてもいいものを見させてもらいました。後日、バスケット

ボール部の球納めにも参加し、生徒たちと楽しく汗を流

しました。

長いと思っただけで、あっという間に充実して、あっという間の短い4週間でした。教

育実習を充実したものにできたのは、私を明るく迎えてくれた

先生方や生徒のみなさんのおかげだと改めて感じています。

この期間中に得たものは必ず今後の生活に繋がるものだと思います。そのため、この貴重な

経験を糧にこれから過ごしていきたいと思えます。

また、部活動では、バスケットボール部の練習に混ざったり指導したりしました。実習中に

社会福祉実習を終えて

社会福祉学部4年 箕浦 智之



2020年8月7日から9

月10日まで、平川市社会福祉協議会での社会福祉実習に参加

しました。社会福祉協議会は、住民主体の原則の下、生活上の課

題や困難を抱える住民への個別的な支援に取り組むとともに、

住民の組織化や連携の促進によつて、地域の福祉課題の解決

に取り組む団体です。

私は、地域における「社会的排除」の現状を知り、「社会的

実習を終えて

社会福祉学部4年 須藤 咲季



私は、精神科病院と地域活動支援センターの2か所で実習を

させて頂きました。実習を通して、精神保健福祉士は、想像力

をもって患者さんやご家族の方を理解し、対応することが求め

られると学ぶことができました。想像することは、患者さん

はどんな想いを抱えているのか、ご家族の方は何を思っ

ているのか、自分が相談を受ける立場であればどういう気持ちにな

るのかなど、どれだけ相手に関心を寄せることができるかとい

うことになりました。また、想像することは、目の前にある情報

からだけではなく、見えない部分にも意識を向けていくことも

大事になってくるということがわかりました。さらに、患者さ

んの言葉から、なぜそのような発言をされているのかといった

言葉の裏側についても考えていく必要があると学びました。

地域活動支援センターの実習では、利用者さんに対する声掛けが重要になると気づきまし

た。センターでは、来所される知症に伴う成年後見制度の利用

需要の増加が予想される中、本人の意思の代弁や権利擁護な

ど、私たち社会福祉を学んでいる者が果たすべき役割はより大

きくなると思われま。私もその端くれとして、地域の福祉に

取り組んでいきたいと思えます。

4年間の実習を終えて

看護学部 看護学科4年 横山 結



4年間の実習を通して、患者さんとかかわり方や多くの知

識・技術など、たくさんを学ぶことができました。

1、2年生の実習では、主に患者さんとのコミュニケーションの取り方、看護の展開の仕

方について学びました。患者さんとのコミュニケーションをと

る際は、自分が想像したことやコミュニケーションをとった

り、ケアを行う中で、患者さんの状態などを見たりしながら

どのよう看護ケアが必要かを判断してケアを行っていく大切

さ、そしてコミュニケーションの大切さを実感しました。

3年生からの領域別実習では、より専門的で幅広い知識が

求められました。実習が始まれば、各領域から出される事前

学習をこなすことで一杯でした。そのため、自分の知識・学

習不足を実感することも多く、不安も大きかったですが、

自己学習をして病態などが理解できるようになると実習が

楽しくなり、もっと色々なことを学びたいと思うようになり

ました。私が特に印象に残っているのは、4年生の最後に行

った小児領域の統合実習です。子どもや母親とのコミュニ

ケーションや遊び、様々なケアの観察・実施などを通して、

子どもは周りの大人が自分とどう関わっているのかをちゃんと

見ていること、自分の関わり方ひとつひとつで活かしてい

が、処置へのイメージなどに繋がりが、子どもの今度の人生に大きな影響を与えることを学

ぶことができました。そして、親子にとって大切な時期に自分

が関わらせてもらっているという意識を忘れてはいけないと思

いました。また、自分の気持ちを伝える力が未熟な子どもと

関わる上で、行動や表情から子どもの気持ちや理解しよう

とするにはもちろん大切ですが、それと同じくらい母親を

はじめとする家族とのコミュニケーションが大切である

ことを実感することができました。

新型コロナウイルスの影響で残念ながら学内となつてしま

った実習もありましたが、先生方が様々な準備と工夫を

してくれておかげで、たくさんの学びを得ることができ

ました。この4年間で学んだ多くのことを生か

し、今後も勉学に励み、患者さんと家族の気持ちに寄り

添ったかかわりができる看護師になれるように、頑張り

ていきたいと思えます。

や手術、治療によって普段とは異なった生活をし、

少なからず不安を抱えているという

ことを実感することができ

ました。机上の学習だけでは得られない、貴重な体験とな

りました。これから、看護師として病院に勤めた時に、

学生時代の比にならないほどの勉強が待っていると思

います。多くの疾患について勉強をし、正確な知識・技

術を身につけるとともに、いつもこの言葉を思い出し、

患者さんの心の声に耳を傾け、患者さんと誠実に向き

合える看護師になりたいと思

実習の報告

看護学部 看護学科4年 清水 麻以



始まる前は長い道のりだと思

っていた領域別実習も、終わった後に振り返ると、あ

っという間に感じました。今年

は、新型コロナウイルスの流行によ

り、臨地で行えない実習もあ

判断してケアを行っていく大切さ、そしてコミュニケーション

の大切さを実感しました。

3年生からの領域別実習では、より専門的で幅広い知識が

求められました。実習が始まれば、各領域から出される事前

学習をこなすことで一杯でした。そのため、自分の知識・学

習不足を実感することも多く、不安も大きかったですが、

自己学習をして病態などが理解できるようになると実習が

楽しくなり、もっと色々なことを学びたいと思うようになり

ました。私が特に印象に残っているのは、4年生の最後に行

った小児領域の統合実習です。子どもや母親とのコミュニ

ケーションや遊び、様々なケアの観察・実施などを通して、

子どもは周りの大人が自分とどう関わっているのかをちゃんと

見ていること、自分の関わり方ひとつひとつで活かしてい

くしていきたいと思えます。

自分の行動を振り返りました。患者さんから情報収集しよう

として、会話が自分主体になつていたのでないか、自分の立案

した看護計画を実施しようとい

う気持ちばかりが先行してい

なかったか、つまり、患者さん

の気持ちを第一に考えることが

できていなかったのではないかと感じました。

この実習を通して、疾患につ

いての知識や看護を学ぶことが

できました。そして、この患者

さんとの出会いによって、自

らの心持ちや行動を振り返る

ことができました。また、平

気そうにしたいと思



文学部の 学生チャリティー活動

2018年度の後期にフォーサイス先生のWorld News & Culture B授業で学生たちが本学のキリスト教の価値観に沿った世界のチャリティー・プロジェクトを行いました。グループワークで世界の問題点を研究して、応援できるチャリティーを選びました。その時事問題を詳しく調べてどのように応援できるか相談してプランを準備しました。研究



するチャリティーを以下のように絞りました。「ソマリアにおける教育問題とネパールにおける教育問題」です。各グループが一つの問題を研究し、そのことについてポスターを作り、本学が応援できる手段の提案を含めて授業で発表しました。各グループの発表を聞いた学生は、ネパール教育問題をスイーツの販売を通して応援することを決めました。2018年12月に学生たちが色々なスイーツを作ってコーヒー等も販売しました。同時にお客さんにネパールの教育問題について説明しました。他の大学の学生と教職員の厚情で、学生が¥24,004の寄付金を集めました。想像を上回る寄付金が集まり、「ソマリアの女性3360人の生計向上」と「1500ネパール人の教師研修」5000人の男女を力付ける「両チャリティー」にお金を寄付することに決めました。



最近、ネパール教育チャリティーから連絡がありました。寄付金を使ってネパール人教師51名をトレーニングし、地震が多い北ネパールのゴルカ地方の学校に教育サポートをすることができました。寄付金を貰った人からこのコメントを頂きました。

「これから」を気楽に話そう！ 学生×社会人の ふらっとカフェに参加して

20歳の私が思うこと

文学部 英語・英米文学科3年 大澤 慈子

今回、このワークショップに参加し、自分の将来について改めて考えることができたと思います。私は現在、県外で教員になることを志望しています。その上で、フットソーティングというワークを行った際、青森県と東京を比べ、地元である青森県から実現できること、逆に東京じゃないと実現できないこと

を考えた。現在20歳の私は、交通面なども充実していて、何か新しいものが出たらすぐに体験できるという点で、東京や首都圏の方が暮らしやすいと考える一方で、地元の方が、自然が豊かで、近所の人たちとつながりを大事にできると思いました。これを踏まえて更に40代の自分はどう考えるのかを考えてみると、東京などの首都圏の方が交通面や新しい技術などに触れることができるという考えは変わらなかったのですが、それに加えて「医療が充実している」と考えました。一方で、地元の方が、人とのつながりを大事にできるといふ考えは変わらなかつたので、その境で趣味を楽しむことができる」と考え



ました。現在20歳の自分と将来40代になった自分について考え方を比べてみると、20歳も40代も、東京などの首都圏は自分自身の生活に関わってくる事柄が多いことに比べ、地元は、自分以外の誰かとのつながりであったり、自分の趣味や休日の過ごし方に関わる事柄を選んでいられるように感じました。

私は青森県が好きです。青森県は自然が豊かで、地域の方々も親切で、暮らしやすい環境だと思っています。今回のワークショップを終えて、改めて自分の進路・将来について考えてみました。今でも県外への就職を考えていますが、今は、県外で教員になった際には、私の地元である青森県の魅力や「青森県を知らない子たち」に伝えたい

青森の良さvs 自分の将来への希望

看護学部 看護学科3年 洞筒 未歩

青森といえば何が思い浮かぶか？と聞かれたとき正直に答えるのであれば「田舎、よく言えば「自然がたかく」と答えていました。しかし、今回のワークショップをやってみて青森の印象がとて変わりました。自分

するのであれば、都市圏よりも青森の方がいいと感じました。また、子どものためにも自分のためにも治安が悪くない地域が良いと思っていたので、青森は都市圏よりも良いと感じました。また、青森は地産地消をしていて安全でおいしい物がたくさんあります。

分は、近い将来はキャリアアップをしたいと考えていました。しかし、今回のワークショップをしたら、キャリアアップのしやすさは都市圏の方がいいと思いましたが、良いと思っただけで、自然がたかくさんあり子育てにとても向いているという事です。私は、将来結婚をして子どもができたら、のびのびと子育てをしたいと考えていました。のびのびと子育て

今回のワークショップで感じたことは、都市圏のよさもすっかり理解した上で青森の方が自分の将来の夢や希望に適切であるということです。都市圏の良さは、交通の便、買物のしやすさがあります。しかし、私は将来家族のことを第一に考えたいと思っているので、のびのび子育てできることや、夫婦が仲良く暮らせるという夢を実現しやすい青森の方がいいのではないかと感じました。